

ーシンポジウム発表者レジュメー

## 『社会哲学の未来をどこに見出すか』

重田 園江（明治大学政治経済学部教授）

### 1. はじめに

社会哲学って何でしょう？

☆「社会」について

さしあたり、政治—経済—社会 の区分の中で考える。経済と社会は同時に出現したというのが、私の考え。一八世紀の半ば。それ以前に社会に関する学問的考察はない。

political economy と civil society は同じときに出現し、政治一家の区別を無化する。

社会であっても社会的なものであっても、どっちでもいいと思ってる。

ただし、政治経済学と市民社会の概念史は、ものすごく複雑。

ヒュームの civilised society と civil society の違い、ルソーの civil なものと political なものの違い、ファーガスン「市民社会史」の叙述。この時代に見られる civilisation についての複雑な態度。commerce と luxury と市民性と徳と武勇と。

マンフレッド・リーデル『市民社会の概念史』。細かすぎて読んだ直後に忘れるという欠点があります。19世紀以降のドイツ語圏での市民社会の用例に拠ると、論点がずれてくるという話。

日本の「市民社会派」はどれをどうつないで「市民社会」という言葉を使ったか？誰かヨーロッパの概念史との関係でちゃんと整理してください。

つまり、「市民社会の哲学」の系譜の中で、自分たちが戦後日本でやってきたことを位置づける作業をする人がいないとだめでしょう、ということ。

☆「哲学」について

あるものを、ただ「あるもの」として受け入れるなら、哲学はない。なぜあるのか、どうあるのか、どうありうるのかの問いが現れれば、あらゆる場面に哲学が存する。

言葉を使うことは哲学ではない。なぜある言葉が通じることが不思議になったとき、そこに哲学が生まれている。

言葉には使用とルールがあり、使用はパロール、ルールはラングである、あるいは発話行為と文法がある、と言って納得したら、その瞬間に哲学は消える。「語の意味とは語の使用である」と言ったところで、そこにあるのは新たな問題であって答えではないとすぐに気づき、適切に次の問いを発しつつするときだけ、哲学が持続する。

## 2. 社会哲学って何をすること？

私にとっては、社会の領域を、経済および政治との関連で捉えることが、最初の課題だと思っている。それが適切な場面でうまくなされれば、どんな問題があり、それはどのように解決されるべきか、どこに着眼すべきかが自ずと見えてくるのではないか。

### 例1

人間と物資と自然を数値として把握し、管理すること

統計学、国勢調査、社会工学的生産管理、心理テスト、IQテスト、犯罪心理学、環境犯罪学、地理的な人間管理(地理プロファイル)、マーケティング、健康診断、出生前診断など。

これらの領域が出現した政治経済社会的背景と、そこに現れた種別的な(specific)知のあり方、というか理屈や論理を理解する(背景にある価値観は驚くほど単純なのに、種別的な知がどんどん進化していくのがちょっとおもしろい)。

これって社会哲学でしょう。『統計学と社会認識』(T.M.ポーター)の関係を問う、という問題意識の中にあるもの。

### 例2

社会の領域はどのようにして現れたのか、それ以前の「団体」とどのように違っているのかを、歴史的・思想史的に考える。

- ・中世秩序から近代秩序への変容の中で、「働く人」を取り巻く状況はどう変わったか。
- ・いわゆる「生活保障」に関わるセイフティネットは、中世から近代へ、時代とともにどう変わってきたか。
- ・「市民社会の思想史」なるものの出現と変容を、思想史的にたどりなおす。

### 例3

働くことと生きることの関係について、人はどのように考えてきたのか、どのように考えるべきなのか。

・「連帯のシステム」は働く人の差異と共通性をどのように結びつけることで相互扶助を制度化してきたのか。

・「連帯のシステム」は働く人とそれ以外の人、働ける人と働けない人をどのように結びつけてきたのか。

### 3. まとめ

人間の他者関係にはさまざまな様態がある。それを大きくまとめる場合の三つの指標が、経済的関係、政治的関係、そして社会的関係ではないか。社会的関係の特徴とはどんなもので、それが経済的関係および政治的関係とどのようにつながっているのかに興味がある。ある人とある人のある場面での関わりの中に、経済的側面と政治的側面と社会的側面が含まれるのではないかと思う。その場合の社会的側面というのは、他者関係が利益とも権力とも異なる関係の様態を含むということ？そこはよく分からないです。

こういうことを「哲学的」に考察するのが社会哲学なのでは？

### 文献

ホブズ『リヴァイアサン』『市民論』、ルソー『人間不平等起源論』『政治経済論』『社会契約論』、

ヒューム『人間本性論』『道徳・政治・文学論集』、スミス『道徳感情論』『国富論』、デュルケム『社会分業論』『自殺論』

『社会学的方法の規準』、フーコー『監獄の誕生』『社会を防衛しなければならない』『保障・領土・人口』『生政治の誕生』

ロールズ『正義論』、ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』、

重田『フーコーの穴—統計学と統治の現在』『連帯の哲学 I』、『ミシェル・フーコー—近代を裏から読む』、『社会契約論』

というタイトルの本が今秋出る予定です。

### 論者略歴

重田園江（おもだ そのえ）東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士過程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員を経て、現在は明治大学政治経済学部教授。専門は、政治思想史、ミシェル・フーコー研究、確率統計思想史、19～20世紀フランス社会思想。著書は『ミシェル・フーコー—近代を裏から読む』（ちくま新書、2011）、『連帯の哲学I—フランス社会連帯主義』（勁草書房、2010）、『フーコーの穴—統計学と統治の現在』（木鐸社、2003）。訳書はイアン・ハッキング『偶然を飼いならす—統計学と第二次科学革命』（石原英樹と共訳、木鐸社、1999）。